

今月のメッセージ（2021年12月）



光と命と愛

静清地区共同宣教司牧担当司祭 高橋慎一神父

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言葉について。この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現われたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。」

「神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にはありません。」

「しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。神の内にもいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。」



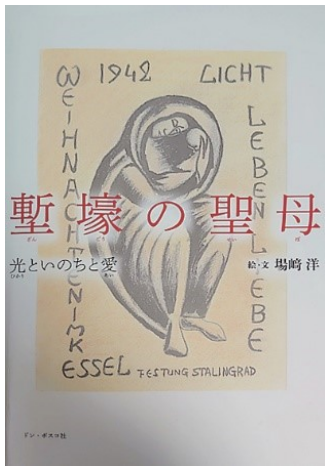
ヨハネの手紙一の1章1節—2節、7節—8節、2章5節—6節は、人となって、私たちの間に現れた、命の言葉であるイエス様の光によって、クリスマスを迎える私たちが自らの内にある罪の暗闇を照らし、神の言葉を守ることにより、愛を現すように招いています。

光と命と愛、1942年のクリスマス、零下40度のスターリングラードで、ソ連軍に包囲されたドイツ第6軍の軍医の一人であるクルト・ロイバーは、聖母子像を地図の裏側に木炭で描き上げて、塹壕内にある野戦病院の壁に掲げました。故郷から遠く離れた戦場で迎えたクリスマスに、負傷し、凍傷と栄養失調に苦しむ若い兵士たちは、暗闇を照らすロウソクの光の中で、聖母子像を見つめました。

聖母は自らの衣服の中に、幼子イエスを包み、聖母子は、互いに顔を愛情深く密着させ、この耐え難い状況の中で平安に守られているようです。聖母子像の周囲には、「光（LICHT）」「命（LEBEN）」「愛（LIEBE）」という聖書の言葉が書きしるされています。故郷では、牧師であったロイバー医師は、この絶望的な状況の中で、心のよりどころを自分の患者たちに、信仰によって現したかったのでしょう。



スターリングラード戦の包囲の中で、ドイツ第6軍の将兵33万人のうち20万人以上が死

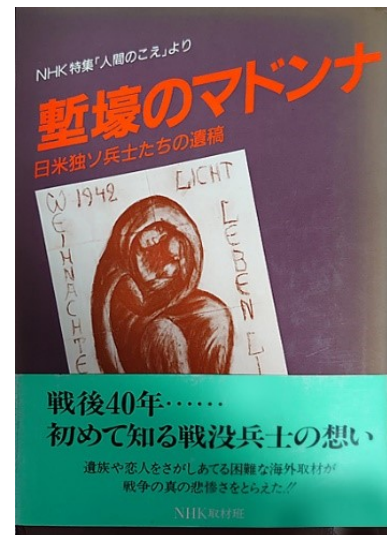


亡し、降伏後捕虜となった 9 万 6 千人のうち、収容所生活を経て戦後ドイツに帰還できたのは僅かに 6 千人であったのです。捕虜となったクルト・ロイバーは、1944 年 1 月 20 日に収容所で死亡しました。

この聖母子像については、札幌教区の間崎洋神父様（2021 年 1 月 12 日帰天、享年 62 歳）の「塹壕の聖母」という本を通じて知りました。私は、間崎神父様とは神学校で同級生でしたが、神学校の寮の窓から広いグラウンドをラグビー姿で駆け回る彼を、よく見かけたものです。とても頑健な身体を持っている人物と思われていましたが、叙階後の忙しい司祭生活の中で、いつしか腰の神経を痛めてしまい、激痛を十字架として背負いながらも、司祭生活を献げ尽くしました。

今となっては、いつの日か天国で、彼に尋ねてみるしかありませんが、包囲下で、聖母子像に救いを託したクルト・ロイバーの体験と、病の苦しみに囲まれた我が身を重ねていらっしやっただのかもしれませんが。「塹壕のマドンナ」とロイバーの遺族によって呼ばれた、この聖母子像の絵は、現在、ベルリンのウィルヘルム皇帝記念教会に、世界平和の願いを込めて掲げられています。ドイツ語圏では、大変に有名な聖母子像のひとつとなっています。

クリスマスの光と命と愛が、いつの世においても心のささえを求める人々の内面の暗闇を照らし続けますようにお祈りしたいと思います。



「塹壕の聖母 光といのちと愛」 間崎洋著 ドンボスコ社 2011 年

「塹壕のマドンナ」 NHK 取材班 日本放送出版協会 1986 年